

星影のスピカ

毒吐き道化

――吐く息が白い。

凍てつくような寒さが俺に身を刺した。

白く丸い月が嘲笑うかのように俺を見下ろしている。
星の輝きはなく、月以外に夜空に浮かぶものはない。

「寒い……」

俺は手に生暖かい息を吐いた。

「こんな寒い日の警備は最悪だな」 誰に言うでもなく呟いた。

すると、「そうだね。軍人さんも大変だよ」と、俺の背後から声が聞こえた。

腰元の拳銃に手をやり、後ろを振り返った。

振りかえると、そこには一人の少女がいた。

――ありえない。

俺は油断することなく、拳銃を少女に向けた。

少女は余裕綽々とした表情で俺を見つめている。

「お前は誰だ。どうやってここまで来た？」

ここは城塞の最上階。俺以外にも警備の者は居る。

――例え少女といえどもここまで登って来られるはずがない。

「んー、そうだねえ。星の国からやってきたので、誰にも見つかることなくここに居まーす」
少女は夜空を指差して、にっこりと笑った。

「――イカれてるのか？ 何をしに来た。答えによっては……撃つ！」

「ひどいな、イカれてなんかないよ。まあ、目的があってやって来たわけですよ。――実はあなたを殺しに来ましたー！」

少女は一人で拍手をする。その乾いた音は夜空に空しく響く。

「とか言ってみたりして。冗談だよ」

少女は笑みを絶やさず言い放った。

「お前なんかには殺されはしないさ。俺は王を守る為に存在してるんだからな……」

少女相手に何を言っているのだろう、と我ながら呆れた。

「それは素敵な忠誠心だね。立派、立派」

からかっているような口調で少女は言った。

「――だからお前の目的は何だ！」

俺はつい苛立って声を荒げた。

「目的？ そうねー、あえて言うなら興味。君と言う面白い人間に興味を持ったわけなのだよ」

「――面白い？」

俺は訝しげに少女を見つめた。

「私、スピカって言うの。確か君は……ロジャー君だったよね？」

少女は口の端を最大限に上げた。

「何故、俺の名前を知っている？」

確かに、俺の名前はロジャーだった。

「だって、お空から見てたから。ま、信じてくれないよねー」

さほど面白くなさそうに、スピカは唇を突き出した。
それは年相応の少女の姿であった。

そんな、まだ十五、六歳の少女に「君」とか「ロジャー君」とか呼ばれているのだと思うと若干腹立たしい。

「あ、人が来た。じゃあまた後でね。バイバーイ」

スピカは手を振った。

俺が瞬きをして再び目を開けると、そこにスピカの姿はなかった。

「おい、ロジャーどうした？ 俺のこと撃つなよ？」

次に交代する兵士が驚いた目で俺を見ていた。

「あ、ああ……すまない」

俺はすぐに拳銃を納めた。

——幻覚でも見ていたのだろうか？

静かに夜空を見上げた。

夜空にはただ一つ、白い穴がぽっかりと開いているだけであった——

*

「——何でだよ」と、俺は項垂れた。

瞬間、今日の疲れが全て肩に乗ったような気がした。

「ハロー。おかえりなさい。待ってたよ、マイダーリン」

俺の部屋のドアの前にはスピカが立っていた。

声が響くコンクリート製の廊下。

この声が隣人に届いていないかと心配になる。

「空から見てたから俺の家がわかったのか？」

俺は青筋を立てながら訊ねた。

「ピンポーン！ ご名答！」

スピカは頭上で手を合わせて、一人拍手をする。

「——本当にお前は……俺につきまとうな！」

「いやあ、私、自分の欲求に正直に生きるのがモットーなので」

「お前なんかの欲求に巻き込まれてたまるか」

「そんない」

俺とスピカのやりとりはしばらく続いた。

スピカはドアの前に立ちはだかっている。

——正直、疲れていた。

早く眠りにつきたい。

少しカビ臭いようなベッドが、今だけは恋しかった。

早くベッドに身体を預けてしまいたい。——俺の負けだった。

「勝手にしろ。部屋に入れてやるから寝る邪魔はするなよ」

俺は根負けし、ついに折れてしまった。

「わーい。やったー、ありがとうね。ロジャー君」

スピカは笑った。

そして俺は疲れた表情で部屋の鍵を開けるのであった。

「ねえ、ロジャー君」

布団の中にもぐりこんだ俺に声をかけるスピカ。

「眠る邪魔をするな、と言ったんだが？」

俺は苛立った声をぶつけた。

「まあまあ、少し位いいじゃない。君何で軍人になんかなったの？」

スピカは目を大きく見開き俺を見つめた。

正直さっさと眠ってしまいたかった。

だが、スピカの目は俺の気を引いた。――まるで星空のように、その瞳は輝いているかのような気がした。

「大した理由じゃない。俺の家族は貧困で喘いでいた。家族を食わせる為に軍人になっただけだ」

「.....じゃあ家族さんはどこに居るの？」

スピカは首を傾げた。

俺は言葉を詰まらせた。

脳裏に昔の記憶がよぎった――とても忌々しい記憶。

好んで思い出したい記憶ではなかった。

「――死んだ」

たったその一言。

だがその一言を放つのにとても労力を使った気がする。
肩に疲れがのしかかる。
急にまぶだが重くなり、眠気に襲われた。

「だったら……何でまだ軍人なんてやってるのさ？」

――そのスピカの質問に答えられないまま、俺の意識は薄れてゆくのであった。

鶏の鳴き声と眩しい朝日が俺を目覚めさせる。

テーブルを見ると、スピカがすやすやと寝息をたてながらうつ伏せていた。

寒さに身を震わせながら身体を起こす。

息はやはり白く、凍えるような寒さを感じさせた。

「――おい、スピカ」

俺はコーヒーを淹れながらスピカに声をかけた。

「んー、ああ朝だね」

穏やかな声でスピカは目をこする。

「コーヒーでも飲むか？」

――さすがにこの寒さの中、外に追い出すのは気が引けた。

と、いっても外の寒さとどれほどの差があるのかも計りかねたのではあるが。

「コーヒー苦いからミルクが飲みたーい」

スピカは甘えた声で俺を見上げる。

「勝手に沸かして飲め」

俺はコーヒーをカップに注ぐ。

「了解ー。あのさ、ロジャー君」

スピカは他愛のないような口調で話す。

「ああ？」

「私、行くところないから……ここに住まわせて！」

――俺はコーヒーを吹いた。

聞き間違いだと信じたかった。

しかし、「ねっ、これも何かの縁だと思ってさ？　お願い、住まわせてっ！」と、二度目の言葉を吐く。

俺はめまいが起きたような気がした。

「……ふざけるな。何で知りもしないお前と、このせまい部屋に住まなければならない？」

俺は苛立った。

いきなりふざけた言葉を言われ、怒鳴らないでいる自分を褒めてやりたいものだ。

「……私ね、ホントに住むところがないの。で、ロジャー君のこと気にいっちゃったから……ここに住みたい！」

スピカは目を輝かせていた。

――何も言えなくなってしまった。

独りぼっちがどれだけ不安で、辛くて、悲しいか――自分がよくわかっていた。

「――わかった」

自分で言おうとは思っていなかった言葉が、考えるよりも先に出ていた。

何故かはわからない。

だが、このままこのスピカを放りだすことは出来なかった。

「――本当？　本当？　やったー、ロジャー君と二人暮らしだ！」

「嫌な言い方をするな。――あと、俺は夜警だから夜遅く帰って正午にまた城へ行く。家事はや

ってもらどうぞ。ただで住まわせてやる気は一切ない」

俺はにべもなく言い放った。

「もちろん。私、頑張るよー」

スピカは微笑んだ。

「出かけてくる―――通りの家財道具は必要だろう？」

俺は殺風景な室内を見回した。

二人で住んでいくような家財は揃っていない―――独りになって、家族のものは捨ててしまった。見れば悲しい記憶が蘇る。

俺は寒空の下、コート一枚で外へ出ていった。

まだ暗い街には、すでに人々の声が響いていた―――

*

――スピカと住み始めて一週間が経った。

洗濯は普通にこなしていた。

――ただ、料理の腕は最悪だった。

絶望的な腕前、と言うべきだろう。

「ロジャー君。今日は楽しい楽しいクリスマスだねえ」

スピカは満面の笑みで俺を迎えた。

夜警で疲れた俺の目の前に、お世辞にも美味しそうには見えない料理と、歪な形のケーキがあった。

しかも、大量の料理だ。

――こんな夜中にこれを食べるのかと思うと、少しうんざりした。

「――いただきます」

俺はコートを脱いでテーブルに着いた。

スピカは口をもぐもぐと動かし、すでに料理を食べている。

食べると、やはり見た目通りの味だった。

「ねえ、ロジャー君」

スピカは料理を頬張りながら言う。

「何だ」

「あのさ、もう守るべきものもないのに、何でまだ軍人なんてやってるわけ？」

料理を頬張っているわりにはまともな質問だった。

「――あえて言うなら生きていく為だよ。軍人は金になるからな」

俺はむりやり肉のようなものを口につめた。

「でも軍人なんて不幸せで仕方がないと思うんだけど。今は戦争なんてないけど、もし戦争が始まったら人を殺すことになるんだよ？」

スピカは口元にケチャップをつけながら、俺の顔をまじまじと見つめる。

「――生きる為だ。仕方がない。優しさじゃあ、この世界は生き延びていけないんだから」

「でも、ロジャー君は優しいじゃん」と、スピカは微笑み、「私と一緒に住まわせてくれるし……それに私の料理を文句も言わずに食べてくれるじゃない？」

――気付くと俺の皿の料理はなくなっていた。
いつの間にか食べあげてしまっていたようだ。

「――ねっ？」

スピカは笑いながら歪なケーキを切り分けているのであった――

*

「ロジャー？ お前、噂聞いたか？」

同期のライアンが話しかけてくる。――たぶん軍の中で一番話せる相手だろう。

「一体何をだ？」

思い当たることがなかった為、訊ねる。

「いや、ただの噂なんだけどな？隣国と緊張状態が続いてただろ？ 近々戦争が起こるんじゃないか.....って噂があるんだよ」

ライアンは溜息をついた。

「本当か？俺たちも戦場に立つんだろうな」

俺は腰元の銃に手を伸ばした。硬く冷たい銃に手が触れる。

「まあ、そうだな。本当、物騒な世の中だな.....数年前にも戦争があったって言うのに.....。確か俺たちが軍人になって一年目の時に前の戦争が終わったんだったよな？」

ライアンは口を尖らせて不満気な溜息をつく。

「――そうだな」

それは、また俺に忌々しい記憶を蘇らせる。

頭を軽く振り、嫌な記憶を振り払った。

「まー、下っ端の俺たちはただただ戦争がないことを祈るだけだよな。馬鹿な戦争で真先に命を散らすのは下っ端なんだからさ」

「ああ、そうだな、ライアン。――例え戦争になったとしても、お前……死ぬなよ？」

俺はライアンの目を見据えた。

「俺が死ぬわけないだろうが。死んじゃったら街中の女の子を泣かせちゃうんだからな。まあ、お前が死んでも骨を拾ってやるよ」

ライアンは笑った。

「……そうだな」

俺も微笑みを浮かべた。

そして踵を返し、歩き出す。

「お前も死ぬなよ」

背後からライアンの声が聞こえた。

振りかえらず、ただ手を上げた。

ライアンもどこかへ歩いて行く足音が聞こえるのであった。

*

「ねえ、ロジャー君。一緒に外に行こうよ」

スピカが俺の服の袖を引っ張る。

「……何も買ってやらないぞ」

俺は言い放った。

「それは、残念。でも、それでもいいから行こう！」

スピカは嬉しそうに顔をほころばせた。

俺はスピカに腕を引かれながら部屋を出ていくのであった。

「あら、スピカちゃん？ デートかしら？」

店のおばさんがスピカに話しかける――心外だ。

「うん、デートだよー」

「馬鹿を言うな。ただの散歩です」

街中は活気に満ち溢れていた。――もし戦争が起これば、街は戦禍を被る。

自分の暗い考えにめまいがした。

「ロジャー君。どうしたの？」

スピカが俺の顔を覗きこんでいた。

「――別に何でもない。行こう。お菓子でも買ってやるよ」

俺は無理に微笑みを浮かべた。

「――大丈夫だよ」

スピカはぼつりと呟いた。

俺はスピカの顔を見つめる。

すると、スピカは明るく笑い、「ほら、早く行こう！ チョコレートが私を待ってるー！」と、手を引き走った。

「ああ」

――一瞬。

ほんの一瞬だけスピカは俺の心を読み取っているのではないかと疑った。

だが、そんなことある訳がない。

人でない存在でなければ、そんなこと出来るわけがない。

「ほら、早く！」

——この世には神も天使も存在しないのだから。

「ありがとう、ロジャー君」

スピカはその手のお菓子が入った袋を大事そうに抱えている。

「たまには、な。家事も頑張ってるし——もう十二時前だな。そろそろ行く」

俺はコートをまといながらスピカに言った。

「うん。——ねえ、ロジャー君」

「何だ？」

「ロジャー君、今は幸せ？」

スピカは俺の目を見つめた。

——唐突な質問だった。

一瞬、戸惑った。

「いきなりどうした？ お前らしくないぞ。真面目な表情なんて」

誤魔化すように言葉を吐いた。

「ひどい——。でも今私は幸せだよ——。お菓子がたくさんこの両腕にあるのだから！」

スピカはまたふざけたように笑った。

「それは結構」

俺は微笑み、玄関へと向かった。

出ていこうとした瞬間、「人には、幸せになる権利があるんだよ」と、スピカは言った。

「——そうだな」と、言葉を返しながら部屋を出た。

――幸せになる権利はある。

だが、奪われるのだ。

力のない者は、力のある者に全てを吸いつくされる。
そうやって俺は不幸になった。

また戦争が起こるのだろうか。

また戦争によって奪われるのだろうか。

また戦争のせいで失ってしまうのだろうか。

――色々な人の顔が浮かんだ。

近所の親しい人や、昔からの友。

そして、新しい家族とも言えるスピカの顔。

「奪われてたまるか」

今の俺には、微力ながら力がある。

少なくとも昔よりは。

全ては守れなくても、少しは守れるはずだ。

――そうでなければ、何の為に今まで軍人でいたのか。

例えこの手を血で染めたとしても守りたいものがあるのだ。

一人、そんなことに思いを巡らせながら城塞へと向かうのであった――

*

「ただいま」と、俺はドアを開けて部屋へ入る。

外よりは暖かい。

昔は冷たい部屋に帰っていたのに、スピカが居る為だろうか。

「おかえりなさい」

スピカは笑顔で俺に寄って来た。

「スープ温めておいたから飲もう！」

最近、少しだけ料理の腕が上達した。
朝、一緒に朝食を作りながら基礎的なことを教えたのだ。

「ああ、お腹が空いたよ。ああ、あと……明日休みを取ったから。明日、祭りだから一緒に行こう」

俺はスピカの顔を見ずに言った。
スピカは一瞬動きを止め、顔を輝かせる。

「やったあ！ ロジャー君とお祭りに行けるぞ！ 嬉しいな」

何とも嬉しそうにスピカは笑う。

「そうか。じゃあスープを飲んだら、明日に備えてすぐ寝よう」

こんなに喜ぶスピカを見ると、俺も少し喜ばしい気持ちになった。

久し振りの感情だった。

子供のころ、俺もスピカのように無邪気に喜んでいた——家族全員で祭りに行ったり、遠出をしたりすることに。
久し振りにそれを思い出した。

「よし、飲んで早く寝よう！ ホントに楽しみだな」

スピカはそう言いながら、スープを注ぎ分けるのであった。

「やっぱお祭りはいいね。皆が楽しそうだもん」

スピカは両腕を上げ、くるくると回る。

「人にぶつかるなよ」

俺はそんなスピカの姿を見ながら笑った。

「もちろん。あ、お菓子売ってる！」

スピカはお菓子を買っている露店を見つけて駆け寄って行く。

「ロジャー君」

目を輝かせてお菓子を見ているスピカを眺めていると、後ろから声をかけられる。

振りかえり、「あ、リエル……」と、言葉を返した。

「お祭りに来るの、珍しいね。初めて見た気がする」

花屋の娘のリエルが微笑ましくこちらを見ている。

「ああ、親戚の子を連れて来たんだ。俺だけだったら来ない」と、スピカを指差した。

すると、スピカは振り返り手を振る。

「花屋のお姉さんだね。ロジャー君の知り合い？」

スピカは俺の顔を見つめ、にやりと笑う——何を考えているのか。

「スピカちゃんだね。私、リエルって言うのよ。スピカちゃんってロジャーさんの親戚だったのね」

リエルは微笑みながらスピカの頭をなでる。

「うん。リエルさん、ロジャー君の知り合いだったんだねー」

スピカは笑みを浮かべる。

俺のことは「ロジャー君」と言うくせに、リエルのことは「リエルさん」と言うのか。

「あ、スピカちゃん。これ、あげるわ」

リエルはそう言うと、持っていたかごから真っ赤な花を一輪、手にとってスピカに渡す。

「きれい！　ありがとう、リエルさん」

何とも嬉しそうにスピカは言った。

「悪いな」

俺はリエルに軽く頭を下げる。

「いいの、いいの。スピカちゃん可愛いから、特別だよ」

リエルはスピカの頭をまた軽くなぜ、「じゃあ、花売りに行くからまた今度ね。ロジャー君もスピカちゃん連れて遊びに来てよ」と言って人ごみに消える。

「何でリエルを知ってるんだ？」

俺はスピカに訊ねた。

「毎日散歩してるから、色んなところに行くんだよ。人脈が広いんだよー」

「はは、そうか」

「ところでさ」と、スピカは先程と同じようににやりと笑い、「ロジャー君、リエルさんとはどのような御関係何ですか？」と言い放った。

「――馬鹿。ただの幼馴染だよ。昔、隣同士だったんだ。兵士になってからは城に近いところに引っ越したけどな」

「ふふふ、私はロジャー君の初恋の相手だと見た！　今も好き、かな」と、スピカは笑う。

「違う。馬鹿なこと言っていると、お菓子買ってやらないぞ」

「嫌ー、やめてー。でも、自分でも気づいてないのかな。大切な存在だってこと」

スピカの顔から、一瞬笑みが消えた。

「――失ってから気付くのは、とても悲しいことだよ」

すぐにスピカの顔に笑顔が戻る。

「なんてね」と、言いながらまたお菓子を売っている露店に身体を向けて駆けて行く。

時々、スピカを見ていると怖くなることもある。

——笑顔の消える一瞬。

その時、一瞬だけ人ではないものの影がちらつく。

本当にただの少女なのだろうか、と。

「馬鹿らしい」

俺はすぐに首を振り、スピカのもとへ歩くのであった——

*

「ロジャー。昨日休んでたよな？」と、ライアンが俺の肩を叩く。

今日は普段通り警備についていた。

「ん？ ああ、休んでたけど……何かあったのか？」

「いや、ロジャーが休むのって珍しいな、と思ってさ。普段は仕事仕事なのに……もしかしてデートか？ ほら、あの子……リエルちゃんだっけか？」

「違う。——親戚の子供を祭りに連れて行ってただけだ」

ライアンの言葉を冷たい口調で返す。

「何だ、残念。もうお互いにいい歳なんだから、そろそろ告白しとかないと別の奴に盗られるぞ？」

「——別にかわまない。俺はリエルが好きな訳じゃないし、誰かを好きになろうとも思わない」

「素直じゃないな。でもホント、盗られてからじゃ遅いんだからな」

ライアンは口を尖らせた。

「――後悔なんてしないさ」

俺は呟いて、「じゃあ、そろそろ交代の時間だから俺は行く」と、ライアンに背を向けて歩いた。

後ろからわざとらしくライアンが大きなため息をついているのが聞こえるのであった。

「ロジャー君」と、スピカが顔を近づけてくる。

「何だ。お菓子でも買ってほしいのか？」

「いや、近々戦争が起こるといふ噂を聞いたんですけどー」

スピカは眉をひそめて、口を尖らせた。

「ただの噂だ。噂に振り回されるな」

正直焦った。

こんな子供にまで戦争が起こるといふ噂が広まっているのだ。

不安以外の何物でもない。

「戦争なんて嫌だねえ。どうせ犠牲になるのは罪のない市民なわけだしさ」と、スピカは不満気に呟き、「どうして、人間ってこんなにも馬鹿なんだろうね。戦争で生み出されるものなんてないんだからさ」と、目を細めて言い放った。

「上の奴が考えることはわからないさ。自分さえよければいいと思ってる奴らばかりなんだから」

「まあ、私たち一般市民は戦争が起こらないことを切に願うしか出来ないんだけどね」

スピカは無表情で呟いた。

「――スピカ。お前は、何なんだ？」

気付くと、俺はそうスピカに訊ねていた。

ずっと口に出さないようにしていた言葉だった。

まだ十二、三歳の少女にしては大人びた発言のような気がしていたのだろうか――スピカの言葉は。

一つ一つが、不思議に思えてならない。

全てを見通しているかのような言葉であるような気がしたのだ。

「どういうこと？ 私はただの少女だよ。とってもか弱い女の子だけど？」

スピカは冗談を言うかのように言い放った。

俺は、何も言えなかった。ただ何となく、スピカは異質な気がしていた。

真実を聞くことはとても怖い。

「――俺は、お前の過去を知らない。俺に出会うまで、お前は どうやって生きていたんだ？」

――そうだ。俺はスピカの過去を何一つとして知らない。

「そうだねえ。実はロジャー君に出会う前は殺し屋だったのです！」と、スピカは真顔で言い放ち、すぐに笑みを浮かべた。

「もちろん冗談だけどね。本当は孤児院で育ったのだよ。で、嫌になって逃げ出したわけ」

すぐに言葉を続けるスピカ。

「――すまない。俺は、疲れてるのかもな。何故か、お前が人じゃない存在のような気がした……」

俺は疲れているような表情を浮かべているのだろうか。

何となく、自分に感覚がないような気がした。

「疲れてるんだよ。私はただの女の子だもんね。ほら、もう寝なよ。たくさん寝たら疲れも取れるよ」

スピカは首を傾けた。
そして、優しい笑みを浮かべる。

「――ああ。寝るよ。きっと、疲れてるんだ……」

俺はベッドに座り込んだ。すると、スピカは俺の手を握る。
スピカの手は、とても温かい――これこそスピカが人である、ということなんだろう。

急激な眠気が俺を襲う。
体がぐらりと傾いた。

視界はすぐに真っ暗になる。
こんな眠たくなるほど疲れていたのだろうか。

「――ゆっくり、お休み。ロジャー君」

スピカの優しい声が耳に滑り落ちてくる。
そして一瞬にして俺の意識は最下層まで落ちて行くのであった――

*

「ロジャー」と、呼び止められる。

振りかえると、そこに居たのはライアンだった。

「どうした、ライアン」

俺は足を止め、ライアンを見やる。

「いや、やっぱり起こるみたいだ……戦争が」

ライアンの表情は珍しく沈み込んでいる。
誰だって怖い。
戦争というものは全てを奪い取るのだから。

「――確実なんだな。その情報は」

「冗談でこんなこと言えるかよ。正直、怖いよな。死ぬかもしれないんだもんな」

ライアンは苦しそうに顔を歪める。

俺だって、怖い。

「俺たちは戦争に駆り出されるわけか。――市民を守らなければいけないからな」

俺は自分に言い聞かせるように呟いた。

「ああ、わかってる。俺だって大切な奴らを守る為に軍人になんてものになったんだからな」

ライアンの表情は硬く、噛みしめるように言葉を出した。

「俺もだ。大切なものを守れなきゃ、何の為に軍人になったのかわかりゃしない。絶対に守ってみせる――今度こそ」

俺の脳裏に数年前の記憶が蘇る。

それは、とても苦しいものだ。

俺は、その時に大切なものを守れなかった。

俺を大事に育ててくれた母と、いつも俺に優しくしてくれた姉。

もう、二人は居ない。俺は守れなかった。

だが、今度こそは守ってみせる――スピカを。

いつの間にか、スピカは俺の中で大切な存在になっていたのだ。

あんな幼い少女ですら、戦争になれば殺されることだってある。

「でも、正直――この手で人を殺すことが怖いんだ。大切なものは守りたいけど、この手が血で染まるのが怖い」

ライアンは苦しげに言葉を吐き出した。

確かに、戦争が起こればこの手で人を殺すことになる。

手の平にスピカの手の温もりが蘇る。

人を殺した手で、スピカに触れられるのだろうか。
それとも俺は恐れるようになるのだろうか。
人の温もりを。

「俺も、怖いさ。けれど、守れなければ意味がない」

まだ、人を殺したことがないからわからない。
人の命を奪う感覚が。

「――そうだな。こんな弱気じゃ、守れるものも守れないよな。ごめん、ロジャー」

ライアンは弱弱しげに微笑みを浮かべた。無理やりな笑みを。

「いや、誰だってそうに決まってる。恐れるさ、人を殺す感覚を」

俺は手の平を見つめた。
そして、ゆっくりと力強く握りしめる。

「前も言ったが……死ぬなよ」

俺はライアンの目を見据えた。
ライアンはゆっくりと笑みを浮かべ、「言っただろ？ 俺は死なないって」と、言い放った。

「――そうだな」

「お前も、死ぬな。死んだら許さないからな」と、ライアンは俺の肩を叩いた。

「ああ。戦争が終わったら、一緒に酒でも飲もう」

俺も笑みを浮かべた。

「そうだな。美味しい酒を飲もうぜ。もちろん、リエルちゃんも誘ってさ」

ライアンは悪戯っ子のような笑みを浮かべる。

少しだけ、恐怖が薄れた。

怖がってはいけないのだ。
大切なものを守ることを躊躇なんてしてはいけないのだから。

俺とライアンは互いの恐怖感を共有するように、互いに見つめあうのであった――

*

「不穏な空気が流れてますよ、街中に」と、スピカは俺を見つめて言った。

「――だろうな。もうすぐにでも戦争が起こるような状態だからな」

俺はきっぱりと言い放った。「ロジャー君も戦地に赴くの？」

スピカはまじまじと俺の顔を見つめている。

「――当たり前だろう。俺は軍人なんだ。王はもちろん、市民を守らなくちゃいけないんだからな」

俺はスピカの目を見つめ返した。
何となく、スピカの目には憂いが見えるような気がした。

「そう。ロジャー君は軍人、だもんね。でもさ、おかしいよね。勝手に上の奴らが戦争を始めておいて、犠牲になるのは私たちなんだから」

スピカは面白くなさそうに口を尖らせた。

「仕方がない。俺たちにはどうしようもない。まあ、お前は心配するな。絶対に守ってやるさ、絶対に」

静かにスピカの頭を撫ぜる。

「――ありがとう。でも、ロジャー君が死んじゃうのは嫌だからね。何よりも自分の命を大切にしてよ」

スピカは俺の手を強く握りしめる。

「わかってる」

俺も強くスピカの手を握り返した。

スピカの目には強い光が宿っている。

「――一生懸命に生きてる人たちが馬鹿を見ることがあってはいけないんだよ」と、スピカは静かに言い放った。

「ああ、だがどうしようもないことだ。俺みたいな下っ端の軍人が出来ることなんて限られてはいるけど、精一杯のことはやらなくちゃいけないんだよな。皆が幸せになれるように」

「――皆が幸せになるためなら、ロジャー君が不幸になってもいいわけ？」

スピカは俺の頬に触れた。

「何か犠牲がなくちゃ、守れないものだってあるだろう？」

「犠牲で成り立った幸せなんて、嬉しくないよ」

スピカは悲しそうな光を瞳に宿らせる。

「そんなこと言うな。お前を守れるなら、それは俺にとっての幸せだ」

「私だけじゃないでしょ。リエルさんも守らなきゃ。――ホントは好きなくせに。死んだら、リエルさんと結婚なんて出来ないんだからさ。絶対に生きなきゃ」

スピカは優しく微笑んだ。

そして、また口を開き、「想いは伝えないと。あとで後悔するのはわかりきってるんだから」と、俺の目を見つめた。

「――本当にお節介だな。でも……確かにその通りなんだろうな」

俺は目を軽く閉じ、過去を思い返した。

言いたかった言葉を、言えなかった。

母や姉に対して、「ありがとう」という言葉を。
照れくさかったのだが、今では言うておくべきだったと後悔している。

「同じ過ちは繰り返さないようにしなきゃな」と、俺はスピカの頭を撫ぜた。

するとスピカはいじわるな笑みを浮かべ、「やっぱり、リエルさんのこと好きなんだね」と、面白そうに言う。

「――馬鹿」 俺はスピカの頭を軽く小突く。

「ああー、暴力反対だよ！」と、スピカは頭を押さえて笑った。

こんな当たり前の毎日は、いつまで続くのだろう。
もうすぐ、終わってしまうのだろうか。

少し、胸が締め付けられた。
けれど、俺の胸には一つの決心があった。

スピカはまるで俺の心の中を読み取ったかのように、楽しそうな笑みを浮かべるのであった――

*

「あれ、ロジャー？」

リエルが目を丸くして、俺を見つめる。

「おはよう、リエル」

俺は、リエルの働く花屋で足を止めた。

「どうしたの？ 珍しいね。ここに来るなんて」

リエルは不思議そうに俺を見つめる。

「いや、ちょっと、花でも買おうかなと思ってさ。何か、適当に見繕ってくれないか？ 二束頼む」

俺は店先の花を見やった。

リエルは微笑んで、「スピカちゃんにあげるの？」と、言った。

「まあな。あと……」

俺は言葉を詰まらせた。

いざ、言おうとすると言葉が出ない。

リエルは手際よく、花をそろえていく。

「でも、ロジャー変わったよね。スピカちゃんに来てから。何か、表情が生き生きしてる。私、安心してるんだよ？」

首を傾けながら、リエルは俺の目を見つめた。

「――ああ。あの通り、スピカは元気な奴だからな。俺もついつい釣られてしまうんだ」

リエルは知っている。

俺が親を亡くしたことを。

だからこそ、気にかけてくれるのだろう。

「良かった。ロジャーが幸せそうにしてると、何か嬉しいよ」

「心配かけてすまないな。あと、ありがとう」

そんな会話をしているうちに花束が出来上がる。

「はい、どうぞ」

リエルは鮮やかな花束を俺に渡す。

「ありがとう」

俺は、二束を受け取り、「これ……」と、一束をリエルに差し出した。

リエルは驚いた表情で俺を見る。

「――受け取ってくれ。俺の、気持ちだ」

ここまでやったというのに、その先の言葉が出てこない。

顔が赤くなるのがわかる。

「ロジャー……」

「噂、広まってるんだろ？ 近々戦争になるって。――俺が、絶対に守ってみせる。お前を……だから」

口が動かない。あと、少しなのに。

リエルは、俺の目を見つめている。

「――好き、だ。守るから、絶対に。だから、もし戦争が終わったら……答えを聞かせてくれ」

俺はリエルに花束を押しつけ、踵を返し駆け出した。

振り返ることは、出来なかった。

けれど、これで例え何が起こったとしても後悔はしない――言いたかった言葉を言うことはできたのだから。

「ロジャー君の馬鹿っ」と、スピカは俺を指差す。

「何がだ」

「答えも聞かないで逃げてくるなんて男としてどうなのさ！」

「別に逃げてきたわけじゃない。考える時間だって必要だろう」

俺は自分なりの正論を言い放った。

「リエルさんは、絶対ロジャー君のこと好きだって！ 考える時間なんて必要ないの！」と、スピカは頬を膨らませる。

「――戦争前に落ち込みたくない」

本音が出てしまった。

どうせ落ち込むなら、戦争後に落ち込みたいと思ったのだ。

「もう、度胸がないんだから！ だったら絶対に生きなきゃね。答えを聞かないといけないんだから」

スピカは腕を組み、口を尖らせた。

「ああ……まあ、生きる理由が出来たってことだよな。これは」

「……度胸がないだけの話でしょ」

スピカは俺を見つめる。

「でも、ロジャー君にしては上出来、と褒めるべきなのかな」と、スピカは言うのであった――

*

「隣国の軍隊が、向ってきてるみたいだ」

ライアンの顔は微かに青ざめていた。

「もう、第一部隊が向かってるんだろう？ 戦地に……」

「ああ、そうだ。俺たちは街を守る部隊だから、もう少しだけ猶予があるわけか」

深々と溜息をつくライアン。

「皆、元気がなくなってるよな。街に活気がなかったよ」と、俺は朝に見た街を脳裏に浮かべた。

戦争が起こると言うのに元気が出るわけがないだろう。

「当たり前だけどな。あと、どれくらいかな。この街が戦争に巻き込まれるのは……やっぱ、怖いよな」

「皆、そうだろう。お前だけじゃない。俺も怖い。怖くない奴なんていないんだよ。皆、守るべきものがなければ戦うことから逃げだしてるさ」

他の皆は脳裏に誰を思い浮かべているのだろう。

「そうだよな。まあ、やるだけのことはやらなくちゃな」

――数年前の戦争を思い出し、体が震えそうになる。

「絶対に、守ろう。そして、生きよう」

俺はまるで自分に言い聞かせるように、ライアンに言い放つのであった――

帰ると、母がテーブルにうつ伏せていた。
姉が床に倒れこんでいた。

母の背には何発もの銃創があった。
姉の頭部に銃創が一つあった。

俺は、軍人になったばかりで、街の外の警備についていた。

「――母さん。姉さん……？」

俺は、呆然とした。

何故、抵抗もしない一般市民にその銃口を向けたのか。

俺は目の前が暗くなった。

この場所に帰ってくるまで、とても不安だった。

走っていると、泣き声が聞こえていた。

子供の泣き声、女性の泣き声。戦争に巻き込まれた市民の嘆きだ。

そして、自分の家族は――死んでいた。

隠れるのが遅かったのだろう。

俺は、呆然として膝をついた。

「――ロジャー」

俺の耳にか細い声が入り込んでくる。

「ロジャー。何で、守ってくれなかったの？」

母と姉が、いつの間にか立ち上がり、俺を見下げている。

青ざめた顔が、とても恐ろしい。

「何で、何で……私たちが死ななきゃいけないの？ 私たちを守ってくれるために軍人になったんじゃないの？」

二人は口をそろえて、俺に言い放つ。

俺は頭を抱えた。

気持ち悪くなった。

俺は、守れなかった。

大切な二人を。

「何で、何で、何で、何で！」

二人は狂ったように叫ぶ。

俺の脳内に二人の叫び声が響く。

吐き気がした。

けれど、空っぽの胃から吐き出されるものはなかった。

二人の叫び声が、俺の心臓を握りしめる。

「ロジャー」

俺の体を誰かが揺さぶる。

目を開けると、スピカが俺の顔を覗き込んでいた。

「大丈夫？ うなされてたよ。悪い夢でも見たの？」と、スピカは心配そうに俺を見つめる。

「――すまない。悪夢を見ていた」

俺の体は、この寒い冬にも関わらず、汗でぬれていた。

「まだ夜中だから、ゆっくり休みなよ。今度は、悪夢なんて見ないから」

スピカは静かに俺の額を撫でた。

その手の平の温もりが、俺に安堵感を与える。

そして、ゆっくりとまぶたが重なっていく。

不思議なくらいの眠気だった。

しかし、怖くはなかった。

もう、悪夢は見ないような気がした。

スピカが言うと、本当に悪夢を見ないような気がする。

「ロジャー君の中の悪夢を殺してあげるよ。ロジャーはそんな悪夢に縛られなくていいんだよ」

スピカの声が耳に入った――とても優しい声。

それと同時に俺の意識は途絶えるのであった――

*

「スピカ、行ってくるよ」

俺はスピカの頭を撫ぜた。

「うん」

スピカの口数は少なかった。

「大丈夫だ。守ってみせる。それに、死なないよ……俺は」

「わかってるよ。ロジャー君が死ぬわけないじゃん」

スピカは静かに頷いた。

俺も頷き、部屋を出た。

——ドアを閉める瞬間、「守ってあげるから」と言うスピカの声が聞こえた気がした。

俺は拳を握りしめ、歩きだすのであった——

「そろそろ、だな」

ライアンが呟いた。

城塞の屋上から、地平線を眺めた。

微かにではあるが、こちらに向かってくる軍隊の全貌が見えた。

気が引き締まる。背中に冷たい汗が流れる。

「銃も手入れしたし、剣もちゃんと研いだし……そろそろ向かわないといけないな」

俺はライアンを見た。

「ああ。絶対に守ってやろうぜ。皆を」

ライアンはその瞳に決意を秘め、言葉を放った。

「もちろんだ。何度も言って悪いが……死ぬなよ」

俺の言葉にライアンは微笑み、「お前も、な」と、返してくるのであった――

「全員、準備はいいか！」

軍司令官が大声で言い放つ。

兵士全員が大声で返事を返す。

――皆、守るべき人の顔を思い浮かべ、己を奮い立たせているのだろう。

「では、前進せよ！」

軍司令官の命令により、軍隊は前に進む。

皆の表情が強張って行くのがわかった。

どんなに奮い立たせても怖いものは怖いのだ。

それでも、皆守るべきものを守る為に、自分を奮い立たせて全身するのであった――

*

耳を劈くような叫び声が聞こえた。

俺は必死に銃口を相手に向ける。

――銃弾が敵兵の頭を貫く。

吐き気がした。

もう、数人この手で殺していた。

一発一発に人の命の重みがのしかかる。

けれど、脳裏に守りたい人たちの姿を思い浮かべ、何とか自分を奮い立たせた。

そうしなければ、命の重みに押しつぶされそうになる。

――人には、幸せになる権利があるんだよ。

スピカの言っていた言葉が蘇る。

人はただ幸せになりたいだけなんだ。

自分が大切と思う人と一緒に、幸せな毎日を過ごせればいい。

ただそれだけなのに――同じような思いを持った人間同士が殺し合わなければならない。

俺はうめき声を上げた。

右肩を銃で撃たれる。

もう少しずれていたら致命傷だったかもしれない。――まだ戦える。

「ロジャー！」

ライアンが叫び、俺の右肩を撃った兵士に銃を向け――撃った。

「大丈夫か？」

ライアンは叫ぶように、俺に話しかける。

「――大丈夫だ。すまないな」

俺は軽く礼をし、ライアンを見やった。

そして、俺はまた銃を構え、敵兵を見据えた。

――刹那。

銃声が耳を突く。

俺の耳に、うめき声が入り込んできた。

「――ライアン」

俺はライアンに目をやった。

ライアンは目を見開き、その状態を理解出来ないかのように腹を押さえていた。

押さえる手からは真っ赤な鮮血が溢れ出る。

「ロジャー……撃たれちまったよ」

ライアンは悲しそうな目に笑みを浮かべた。
歪な音と共に、ライアンの口から黒い血が吐き出された。

「ライアン！」

俺は叫び、後ろに倒れこむライアンの体を支えた。
こんな馬鹿なことがあるのか。
何で必死に生きている人間がこんな目にあわなければいけないのか。
理不尽にもほどがある。

「馬鹿か……ここは戦場だぞ？ お前も撃たれるぞ」

ライアンはいつもの悪戯っ子のような微笑みを浮かべ、俺に言った。

「ライアン……死ぬな。ライアン……」

俺は涙をこらえた。
泣けば、ライアンに笑われる。

「ロジャー、危ない！」

ライアンが表情を歪め、叫んだ。

俺は顔を上げる。
目の前にはこちらに銃口を向ける敵兵が立っていた。

——ここで、死ぬのか。

俺は妙なほど冷静にその事実を受け止めていた。

「——ロジャー！」

聞き覚えのある声が聞こえた。
とても澄んだ、優しい声。

「ロジャー」

その声に誘われ、顔を上げるとそこにはスピカが立っていた。
周りの人間はぴたりと動きを止めている。これは現実なわけがない。
死に向かう人間が見る最後の夢だろうか。

「スピカ？ ーこれは、夢か。走馬灯か？ どっちにしろ、俺は死んだのかな……」

俺は何故か微笑んでいた。
頬が緩む。

「死んでなんかないよ。聞こえなかった？ 守ってあげるから、ってさ」

スピカはしゃがみ込み、「ごめんね。ホントのこと言うと、騙してた。私は孤児院から逃げだした可哀そうな女の子なんかじゃない。まあ、最初に言ってたことが実は本当なんだよ」

スピカは悲しそうな瞳で俺を優しく見た。

「ー星の国からやって来た、か」

俺は初めてスピカと会ったときのことを思い出した。

あれは本当のことを言っていたのか、と何故か笑えてくる。

「私は、星。ずっと地上を見ていたーそして、ロジャー君に興味を持ったんだよ」

「初めて会った時もそんなことを言ってたな」

「そうだね。空に居ると、色んなものが見えてくる。私はずっと空に居たからー星は長生きなんだ。ずっと、ずっと人間を見ているんだよ」

スピカは優しい手つきで俺の頬を撫ぜた。

「お前が俺を `ロジャー君、と呼ぶわけだな。俺の方が年下なんだもんな、だいぶ」と、俺は笑みがこぼれた。

「うん、そうだよ。私のことはスピカお姉ちゃんと呼びなさい！ とか言ってみたりして」と、スピカは微笑み、「人間って愚かだよ。見ててそう思うよ。ずっと昔から、人間は争うことをやめない。そして、下っぱの人間が犠牲になる」

「――そう、だな。人間は本当に愚かだ」

「でも、それでも一生懸命に生きる。だから、私は人間が好きなんだよ。ほかの星たちは、早く人間なんてものを滅ぼしてしまえ、って言うけどさ。でも、私は人間の可能性に賭けてる」

スピカは俺の目を静かに見つめ、微笑んだ。

「――可能性？」

俺はスピカの目を見つめ返した。

「下の人間には力はない――だけど、生きようとする意志がある。その為の生命力がある。人間に本来備わっている力なんだよ。私はそれに賭けている。だから」

「だから、俺みたいな人間に力を貸してくれるのか？」

「力を貸す、とかじゃないよ。ただ、触れあってみたかっただけ。生命力溢れる人間に。君は、それに値する人間だよ」

スピカは静かに立ち上がった。
そして、空を見上げた。

「私に出来るのはちょっとした手助けだけ。――殺してあげる。殺してあげるよ」

目を瞑り、スピカは両手を広げた。そんなスピカの姿を俺はただ見上げるだけ。
――それは、ただの少女ではない、何か神聖な姿を感じる。

「皆の中にある、闘争心、悪意、欲望――全てを殺してあげるよ」

スピカが呟いた瞬間、微かな音とともに雨が降り始める。

「スピカ――お前は、居なくなってしまうのか？」

俺は声に悲しさをにじみ出してしまう。
何故かはわからないが、もうスピカは居なくなってしまうような気がした。

スピカも悲しそうに微笑む。

「うん、さようならだよ。ロジャー君の目の前からは。――でも、悲しまないで？ 悲しまなくていいんだよ。だって私はすぐそばにいるんだから。空を見上げるたびに、私は存在するんだよ。この先、時間が経てば私たちの姿は人間の目には映らなくなるかもしれない。でも、私たちは確実に存在するんだよ――例え、人の目に映らなくなったとしても、ね」 スピカは両腕を広げながら、ゆっくりと回り始める。

「さようなら、か。でも、ずっと忘れない。死ぬまで忘れないからな」

俺は届かないと知りながら、スピカに手を伸ばした。

「――ゆっくり、お休み。もう、悪い夢なんて見なくていいんだよ。次はいつかなあ。また、地上に下りてくるのは……人間の魂っていうのは巡るらしいから、またいつか会えるかもね」

スピカが言った瞬間、俺のまぶたは重くなる。

少し、悲しい。もう、スピカと話すことはないのか、と思うと悲しみがのしかかってくる。

「ねえ、知ってる？ スピカ……乙女座っていうのはこの時季に見えるんだよ」

刹那、俺の意識は夢の最下層へと落ちて行く。
俺の体は後ろへと倒れこむ。
見上げた夜空には、一際輝く一つの星が見えた。きっと、あれが乙女座スピカだろう。

その輝きが見えるということは、さようならの合図でもあるのであった――

*

「おい、ロジャー。ロジャー」

俺を呼ぶ声がし、目を開けるとそこにはライアンの姿があった。起き上がりその姿を見やる。

怪我をしている様子はない。

「俺たち、どうしたんだ？ 確か、皆で戦っていたはずなのに……皆、寝てるみたいなんだ」

ライアンは驚いたような表情で辺りを見回している。

目を覚ました兵士たちも驚いたような表情をしていた。

「――戦争は終わったんだ。終わったんだよ」

俺は安堵した息をもらし、ライアンの目を見た。

ライアンは一瞬、きょとんとした表情をし、嬉しそうに頬を緩めた。

――空はもう明るくなっていた。この明るさでは星は見えない。

けれど、知っている。

星たちは人間を見ていることを。

どんなに見えなくても、確かに存在していることを。

俺はすっかり明るくなった空を見上げ、静かに微笑んだ。

周りの兵士たちも戦争の終わりに感づいたのか、歓喜の声を上げ喜ぶのであった――

「――ただいま」

もう俺を待つ人はこの部屋に居ない。

けれど、いつものくせでその言葉を出してしまう。

部屋はとても冷たかった。一人の寒さだろう。

テーブルを見ると、そこには手紙があった。

誰が書いたのかはすぐにわかった。

俺は急いでその手紙に手を伸ばす。

ロジャー君へ

さて、ロジャー君がこの手紙を見ているということはもうお別れはすませてるんだらうね。

何と言うか、今までありがとうございます。

これが今、一番ぴったりの言葉かな？

見ず知らずの私と一緒に住まわせてくれてありがとう。

私の不味いごはんを食べてくれてありがとう。

いっぱいありがとうって言いたいよ。

うん、私が一番伝えたいことはそれかな。

ロジャー君、幸せになってね。

もう、悪夢に縛られることはないよ。

私が保証するから。

さようなら、ロジャー君。

PS

最後に、ちゃんとリエルちゃんと結婚すること！

幸せになることから逃げちゃいけないよ。

失うことを恐れて前に進めなかったらダメなんだから。

あと、美味しいシチューを作ってるから食べてね。

そうしたら、ちゃんとリエルちゃんのもとへ直行すること！

じゃあ、今度こそバイバイ。

少し、涙腺が緩んだ。

ここで泣いては、スピカに笑われるに違いない。

俺は手紙を置き、鍋の蓋を開けた。

そこには美味しそうな香りを放つシチューがあった。

棚を見ると、二人分の食器。

部屋を見渡すと、色々なものが二人分あった。

そこには確かに二人の暮らしがあった。

俺は少し微笑みを浮かべ、シチューを注ぐのであった――

*

「ロジャー、久しぶりだな！」

外を見ると、そこにはライアの姿があった。

その横ではライアに似た幼子がこちらに笑顔を向けている。

「ホントに久しぶりだな。奥さんは元気か？」と、俺は笑顔を浮かべた。

「ああ。また子供が生まれたから、家で子守をしてるんだ。お前のところはどうなんだ？」

「俺のところは今度生まれるんだ。楽しみだよ」

俺はつい顔を綻ばせた。

「リエルちゃんも嬉しいだろうな。絶対、お前子煩悩だろうなあ。ま、俺も人のことは言えないけどな」

ライアはそう言うと、我が子の頭を愛しそうに撫ぜた。

「まあ、今日はうちで食べて行けよ。デザートくらいはサービスしてやるから」

「でも昔は思わなかったよ。お前がレストランを開くなんてな」

「――昔、兵士をやめる前のことなんだがな.....親戚の子に料理を教えてたんだ。それから、少し料理が楽しくなってな」

俺は脳裏に人懐っこい笑顔を一つ、思い浮かべた。
料理が下手だった一人の少女の笑顔を。

「ロジャー。お客さんがたくさん来てるわよ」

リエルの柔らかい声が俺を呼ぶ。

「ああ、すぐ行く」

俺はライアンに頷きかけ、店内へと促した。
ライアンは悪戯っ子のような笑みを浮かべながら、店内へと足を向ける。

「――幸せだな」と、俺は呟いた。「ん。何か言った？」

リエルは小さく首をかしげ、俺の目を見る。

「いや、何でもないさ」

俺は微笑み、厨房へ足を向けた。
仕込んでいた料理が良い香りを醸し出している。
一瞬、昔食べたシチューの香りを思い出した。

「――今、幸せだよ。スピカ」

俺は厨房の窓から空を見上げた。
少し薄暗くなりかけた空を。

「――そろそろ乙女座が見える時季か」

今夜あたり夜空を眺めてみようか、と俺は思った。

きっと、スピカは輝いているだろう、と。

人には幸せになる権利がある、と言ったスピカの表情が今でも思い出される。

――今、俺は幸せだ。

俺は、まるでスピカに語りかけるかの様に空を仰ぎ、見上げるのであった――

END.